

編集後記

今号は事例報告として二〇〇七年出土の木簡七七件、一九七七年以前出土の木簡一件、釈文の追加と訂正五件、さらに、昨年の研究集会での成果である論文二本、朱甫瞰先生の韓国木簡学会の発足に関する講演を加えて、バラエティーに富んだ内容をする事ができた。

各地の調査担当者の方々をはじめ、原稿をおよせいただいた皆様に心からお礼を申し上げる次第である。木簡の事例を集成するという本誌の特徴から、特に調査担当者の方々に無理を申すことが多く、本誌はその協力なしにはなりたないということを改めて銘じておきたいと思う。

今回も編集に当たって馬場基氏をはじめとする奈文研史料研究室の方々のご尽力によるところが大きく、編集子はほとんど貢献することがなかったというのが現状である。奈文研に迷惑をかけることなく、本誌を作り上げていくことは依然として大きな課題であらう。

現在、本会全体で問題になっているもうひとつの事項にバックナンバーの扱いがある。大量のバックナンバーを奈文研で預かってもらっているのであるが、もはや保管場所がない状態になっているとのことである。問題は深刻である。これはほかの学会でも抱えている問題で、財政上の貢献はしばらく置いて、とにかく保管分を減ら

すことに尽力しているという現状が確かに存在する。非常に安価で販売するとか、諸機関に寄贈するなどの方策を耳にすることがある。もちろん、簡単に必要な部分のみをコピーすれば事足りるという、いわば利便性の向上によるのであるが、それよりも研究機関が狭いスペースに押し込まれているという研究をめぐる貧困によるところが大きいと思われる。

いつばうでは、新しい研究者のために文献を入手する方法を確保することも学会の重要な使命で、「完売御礼」というわけにもいかない。本誌でも初期の号でバックナンバーのないものが現れはじめている。これをどうするかという問題もある。

委員会でも印刷部数の適正化が決定され、いくつかの方策が検討されているが、やはりバックナンバーの売り上げを急速にのばす妙案は見いだせない。なにか適切な対策があれば、委員などに伝えていただければ、幸いである。

このような問題は、全体的に歴史関係の研究者が減少しているという点はあるが、結局、どのように本誌の価値をより高めていくかという問題に行きつくように思われる。編集作業の中でも常に意識していきたい。

今後、東北での特別研究集会や三〇周年シンポなど大きな活動が続く。本誌もまちがいなく充実したものになると思われる。

(鷲森浩幸)